

文化審議会総会（第62回）での意見概要

7月24日、文化審議会総会（第62回）が開催され、熊倉文化政策部会長より「審議経過報告」の説明を行い、総会の委員からは、以下のような御意見があった。

- この「審議経過報告」は、具体的で魅力的な方向性が示されている。
- 今後、ここに盛り込まれている施策の実現に向けて、どう動いていくのかの検討が大切である。
- この報告全て実現できればユートピアだが、実現に向けたプロセスも考えていくべき。
- アーカイブの在り方を総合的に検討し、日本の強みを生かす拠点づくりを推進すべき
- アーツカウンシルの本格実施を検討すべき。
- 2020年のレガシー構築に向けた対応が必要である（前回の東京五輪でデザイナーという職の確立がレガシーとなったように。）。
- 将来、文化芸術を支える人材の育成（特に、子供）が大切である。
- 「重ね技」が大切、例えば、外国から学会に来た人が、文化体験をするようなパッケージ（献立）づくりが重要である。
- 例えば、文化財保護1つをとっても、諸処の事業が複数のルートで実施される。まず、大きな全体ビジョンが示され、個々の事業がその中でどのように位置付けられるのかという示し方が重要である。
- 「文化」は、「法律」や「英語」とともに、「世界共通言語」だ。その力を用いれば、例えば、紛争地域にメッセージを訴えるなど、国際平和などへの貢献が期待できる。
- 島根県隠岐の島町で、美しい平家ポータル、源氏ポータル、姫ポータルを見た。満天の星の下で心が動いた。文化芸術体験も、子供たちの心を動かす力になる。すばらしい体験が必要である。
- 国が上意下達で、政策を作り、方向性を示すよりも、むしろ、現場のすばらしい取組をくみ上げていくことが大切。例えば、けん玉とかポップダンスとか、日本発ですばらしいものとして、世界から注目されるものは、国策として意図されて生まれたものではない。
- 日が当たらない伝統文化などをどうサポートし、盛り上げていくかの視点が重要である。
- アーカイブは、捉える人によって定義や範疇^{はんちゆう}が違う。誰が何をアーカイブするのかという点の整理が難しい。
- 東日本大震災のカタストロフィから、文化芸術の力で立ち上がった姿を世界に提示する意義は大きい。日本で実際に体験した文化芸術の力を世界に示すことになる。是非、被災地で国際芸術祭をやりたい。
- 文化芸術活動の海外展開の推進は、日本への注目度を高め、文化芸術の発信力を強化できるという意味で意義がある。

以上

第14期文化審議会委員名簿

(平成26年3月20日現在)

いしがみ えい いち	石上 英一	東京大学名誉教授
いとう すけろう	伊東 祐郎	東京外国語大学教授
いわさわ ただ ひこ	岩澤 忠彦	一般財団法人NHK放送研修センター常務理事・日本語センター長
おおぶち てつ や	大漕 哲也	東京大学大学院教授
かわしま のぶ こ	河島 伸子	同志社大学教授
かんざき のり たけ	神崎 宣武	旅の文化研究所長
くまくら すみ こ	熊倉 純子	東京藝術大学教授
こもだ はる こ	薦田 治子	武蔵野音楽大学教授
こんの み さ こ	紺野美沙子	女優、国連開発計画親善大使
さこだ く み こ	迫田久美子	人間文化研究機構国立国語研究所日本語教育研究・情報センター長
すずき のり お	鈴木 規夫	前東京文化財研究所長
たかはし やす お	高橋 康夫	花園大学教授
どうがうち まさと	道垣内正人	早稲田大学大学院教授、弁護士
とくら しゅん いち	都倉 俊一	作曲家、一般社団法人日本音楽著作権協会会長、昭和音楽大学客員教授
どひ かず ふみ	土肥 一史	日本大学大学院教授
にしむら ゆき お	西村 幸夫	東京大学先端科学技術研究センター所長
まぶち あき こ	馬漕 明子	国立美術館理事長、国立西洋美術館長
みやた りょう へい	宮田 亮平	東京藝術大学長
やすみりえ	やすみりえ	川柳作家
ゆあさ ま な み	湯浅真奈美	ブリティッシュ・カウンシル アーツ部長

※任期は平成26年3月20日～平成27年3月19日の1年間

※文化功労者選考分科会分属の委員は除く